

## テクラの遺産相続 (翻訳)

川崎医科大学 外国語教室

永末和子

(平成9年9月29日受理)

»Theklas Erbschaft« von Wilhelm RAABE

übersetzt von Kazuko NAGASUE

*Abteilung von Fremdsprachen  
Kawasaki Medizinische Hochschule  
Kurashiki, 701-01, Japan  
(angenommen am 29. Sep. 1997)*

このような夏, そう一八六五年の夏はどうやら, ありがたいことにいつの時代にもいる, 世にいう「土地の古老」といわれる御仁でさえとんと覚えがないような, それどころか, そのせいもあって今後数世紀, 気象学者たちの間でまさしく稀な夏として前例となっていくような勢いだった。そんなこんなで五月から九月までの毎日毎日, 来る日も来る日も, この記述にあたる者の記憶に, 鋸で切断された自殺者の頭蓋骨の列が実に生々しく蘇ってくることになった。彼はかつてこれら頭蓋骨の陳列をある解剖学博物館で, 哀感とともに国家法の深淵に触れる恐怖に震撼しながら, 見入ったものだった。それは, いったいいかなる手が身に及んだか, このような不幸に運命づけられたひとりの人間を, なお重ねて法における権利と有用性を盾に解剖学の手によだねる国家法への無限の恐怖だった。そこには, ここにある頭蓋骨はあのいわゆる自然な死, 愛する隣人たちの手にまもられながら召されていった死とは違って, 重量や組織の点で異常を呈していると注意書きまでが添えられているのだ。そしてかく申す私は心安んじてこの譬え話のハイフンを読者自身にお任せしようというのである。

こうした蒸し暑く, 重苦しい, 動きのいっさいがびたりと停止し, 上から抑えつけられるような日が続くそうした日々に太陽が顔を見せない日が二・三日あった。もちろんこれらは最悪の日を意味する。すなわち人々は, どこだか定かでないのだが, しかし, たしかにどこかで煮立てられているような, 最高に不快なものを呼吸する羽目になった。額の上の燃えるような手は感じる事ができるものの, それを見ることは誰にもできなかった。自己を放棄し, なるに任せていけるほどの強さ, 力つき, ただひたすら温度計が下がるのを期待してじっと息を殺している事ができるほどの強靭さをもつものは幸いである。だが, ありとあらゆる魑魅魍魎を駆ってぐったりとさせたかと思えば, 最高度の緊張状態におくこの暑熱が追っかけ回した人々のほうは, 完全に苦しみに喘きながら自制心を失っていった。こんな彼らにとって残る道は,

あの狂气的エネルギーに満たされたダンテ・アリギエーリの地獄を読んでみるくらいで、そのほかに救いの道はないといってよかった。

窓の向い側に面した庭で一人のギムナジウムのテルティア生(九年制ギムナジウムの第四、五学年)がいよいよながら課題に取り組んでいた。このような酷暑の炎天下、私の焦点の合わせどころといえはさしあたりこの腕白者だけということになる。なぜって彼の苦悶たるや私のそれを遙かに超えて大きいはずであったから。私の目の前の書き物机ごしに彼の姿を初めて捉えたとき、いかに最高の不快が彼を襲おうとも、とにかくお行儀よく、しゃんとしてガーデンズツールに腰掛けていた。とはいえ、それも尤もなことだが、まさしく嘔吐と嫌気の固まりとなつて、膝のうえの文法書をにらみつけていたのだ。こんなものすごい気象の日にラテン語の文法事項とかかずら合っていなければならぬなんて、これを癒しがたい度を超えた恥知らずの貧欲といわずしていったいなんて呼ぶのだ。かくいう私もあの少年が彼の本に投じる以上の嫌悪にあふれた目を私の原稿に投じていた。しかし、やがて私はそうして眺める内に、この少年にある愉快を覚えるようになった。あの不埒な統語論のややこしい規則の渦に立ち向かう彼の努力はすばらしい——いや、もうそれは現実離れしたべらぼうのものであった。彼はあらゆる手段を講じて試みた。そして新しい話法に出くわすたびに絶望と、迫り来る明日という日とハウレンダ一教授に対する恐怖と、それらが一緒くたになり、汗となって滴り落ちてきた。その日、私は一度ならず幾度もため息をつき、ペンを放り出したものだ。だが、私の喉元をしっかりとつかんで離さない必要不可欠というあの舌触りの悪い代物でさえ、時代の、ひどく捉えようのない灰色の蒸し暑さのただ中を貫通する道、そのみを、このまだ若い不幸者に有無を言わさず指し示す冷酷非情な指に比べれば、とうてい敵ではなかった。

彼は、今は行儀よくなどしていなかった。そういうわけでこのテルティア生はいすの背もたれに寄りかかり、何とか平衡を保ちながら座っているのが実状だった。と、次の瞬間、彼はこの黄色に枯れ果てた芝生を囲む花壇脇の耐久レースの最中に、ちょっとこんな一場面を演じさせてみた。あの南西の微風の神ゼピュロースの妻フローラ(古代ローマ神話の春の女神)は今年ばかりはなんと夫に捨てられた哀れな妻の不名誉という役どころ、フローラの子どもたちも全員こぞって悲しげに首をうなだれている。無駄だ、そんなことをしたって何にもならない！昔、『プロヴァンス便り』の作者ブレース・パスカル〔フランスの宗教哲学者・数学者 1623-62〕は同じように腹這いになって、彼の奇想天外な詩想をつかもうとしたという。私たちの学生君もいま枯れた芝生に我が身もろとも、腹黒いツンプト先生<sup>1)</sup>の文法書を投げ出して腹這いになった。少年は次第次第に真の意味のシャウシュピール<sup>2)</sup>へと移行していった。この真っ昼間の脳味噌の腐りそうな蒸し暑さと生来の怠け癖とを相手に戦う試みは、ホメロス作の英雄物語に負けじ劣らじの素材とみえた。彼のいる庭には支那風の四阿亭があった。この四阿亭には梯子が一つかけられていた。あの私たちの年若い友人はその梯子を登りはじめた。一段あがるごとに頭髪をかきむしった。一段一段上るにつれ、苦しみはつづいた。ミニチュア孔子廟の天蓋の上で彼は最後の全く絶望的試みを、すなわちラテン語学の博士になろうとする試みを大胆に敢行した。

それから、——それから彼は運命との闘いを諦めた。

部屋にかすかでもよい、とにかく風の吹き抜ける道を求めて、窓辺に歩み寄ったとき、文法書はもちろん四阿亭の屋根の上に開かれたまま載っていたのだが、しかし、肝心のテルティア生氏の姿はなかった。彼は消えていた。——燃えつきていた。何の痕跡もなく。ハウレンダー教授は、万一それだけのエネルギーがまだ彼にあったとしてだが、明日は最悪のときに直面せねばならない。賽は投げられた！——船は燃え落ちたのだ<sup>3)</sup>。そう、運命との闘いは挫折に終わった。私が共感しつつも、黙って行なってきた観察は、まさにこのとき、静かに、しかし、身を噛むほどに強烈な妬みに変わった。

まだ、私は私の義務と責任に締めくくりをつけ、決別できずにいた。この日一日に課せられた身体的且つ倫理的試練を逃れる術はただ一つ、絶望的跳躍であった。これのみが後にも先にも残された唯一の方法だった。隣家の庭へ降りていくために四阿亭の柱の一本をたよりにしてみようと敢えて実行する気は起きなかったし、そもそもその気にさせる可能性など、はなから私にはない相談だったので、ひとまず義務について論じたキケロの本を閉じた。そうして空想の世界に、覚めた記憶の世界に滑り落ちていった。こうしてこの蒸せ返る午後の日を端を発し、私自身の記憶の糸を紡ぎ、たどり始めた。すると、——ほら、そこに彼がいる。

私は学生だ。ベルリンで学問を学んでいる。そのことは享楽や美味なパンを愛することを嫌うことを意味した。しかし、同時に生活することも私は学んだ。その結果、同じ生という一枚の葉から、美しいものも、醜悪なものも生い育つことを知った。——ああ、偉大な神よ、私はいっさいを学んだのです！ああ、私が頭蓋骨に亀裂や断層、あるいはそれ故に必要な鉄のベルトで締め付けることもいらず、こうして走り回ってられるというこの事実が、私にはなお一つの奇跡と思われた。なぜって頭脳の拡大はそれほど強力だった！私の当時の下宿には、つまりきちんとした良家の三階の私の借間の下の階の部屋にはバイエルン国の大使館随行員が住んでいた。そして一つおいた上の階、つまりは五階にはテクラが彼女の夫とともに睦まじく愛し合いながら住んでいた。私の家主は王の食膳係の一人であった。彼の妻は、私に対しては私の内務省指揮官に自らを任じ、アマンダ・ビリッヒ夫人には月々の支払いの決算書の下に、快適で落ち着いた印象を与えているものは何であるかをとくと確認させつつ、サインをさせるのが常であった。

私がこの住まいに引っ越してきたとき、当然のこととはいえ、この同居人たちに対してそれが親密であれ、疎遠であれ、とにかく関係というもののいっさいが欠如していた。しかし、私の外見は見る人の信頼を喚起し、同時に内なる私のほうも決して失望を与えることはなかった。日常生活で直面する様々なことで、私は喜んで手を差し出した。私が語り聞かされたいろんなことの上に生い茂った草がやがて干し草となった時、私の口はようやく軽やかに、うち解けていった。私自身が体験したさまざまなことは、私個人の成長と完成に有益な作用を及ぼす恰好の素材となった。この個別性の上に、最近、おおかたのよきゲルマン人と同様のあることが付け加わり、私のものとなっていくようになった。こうなってみると私は、できる限り遠方のと

ころまで、すなわちよくないゲルマン人たちが粗暴、且つ恥知らずになるその境界すれすれまで、進んでなつてやろうという気持ちになるに至った。——そう、他人のなかに尊敬の念を起こさせてやろうという野望を抱くまでに。

私は横丁の敷石から、私の部屋の壁から学んだ。そう後者からは前者よりもずっと多く学んだ。このことは天井や床からも同様ということの意味する。というのも何しろ横丁の敷石はひどく薄く、音をむしろ増幅させ、辺り一面にまき散らすものだから、結果的にそのものと同じところに滞留させる効果のみを上げることになった。バイエルン大使館随行員の出入りの様子で、広くヨーロッパ内外の政治の動きを当の本人よりもきわめて高い確度で察知できた。テクラの調子の良いときも、悪いときも私に隠せるものではなかった。その上、ピリッヒ家の生活の様子はごく微かな動きまでも私の太鼓を振動させて映し出された。引越して一週間もたつと、私は文字通り刑事裁判の法廷証人用に特訓を受けた者ようであった。そこで私はこの家屋内に関する全裁判の法廷に設けられた陪審員席にいつでも臨席し、裁判長のような厳肅さできっぱりと証言の矛盾のいちいちを追求しろと言われればできるほどになっていた。半年後、私は粗っぽくも感動的な、しかし陽気な出氣事に参画する巡り合わせとなった。この事件の記憶がふとよみがえったこの瞬間に一八六〇年の不快な、暑い夏の日あの最も蒸し暑かった一刻は一気に飛び越えられた。——

その日もやはり不快な日であった。しかし、季節は十二月のひんやりとした微風が吹く日のことだった。湿っぽい、霧の深い日、そう、とても守りきれないほどの約束を不覚にも背負ってしまったような、そんな日のことだった。それがクレルナーゲル伯父の遺言状が町の裁判所で開封された日であった。

早朝、早々と未亡人は眉をつり上げて、新しい陽光の意味を私に思い出させた。しかし、私にそんなことをする必要はまずなかった。テクラの運命が華々しく輝きながら新しく展開するはずのこの日を私が忘れてなどいられようか。私たちは、もう何週間も前からこの大事件に全身全霊の開口部を開いて待ち設け、全神経を集中させてその日の到来に備えていた。

テクラ<sup>4)</sup>！ドイツの乙女たちのだれもが同情を催さずにはいられないこの名前も、いまこの場合、緑の岸辺にさまよい出る小間使い娘や k.u.k. 帝国<sup>5)</sup>の空想癖のある甲騎兵大佐マックス・ピッコローニ、あるいはノイシュタットの奇襲を扱ったシラーのヴァレンシュタイン三部作の登場人物とは関係なく、ただただ富くじ販売引き受け人ストウリナツキーの妻を指している。バイエルンを代表するあの莊園貴族の外交官が評した言葉を借用すれば、彼女は、彼が人生という大きな賭けの籤でこれという動機もなく引き当ててしまった女、つまりは全くの偶然が富くじ屋ストウリナツキーに送り届けた女であった。そう、彼女は彼が引きもしなかった籤の当たりで人も羨むほどの景品だったというわけである。

この富くじ屋は実際自分の人生で絹を紡ぐ、つまり得をするなんていうことの皆無に等しい男だった。ところが、彼もおおかたの彼の顧客同様に期待を抱いて生きていた。そして彼の妻も彼と一緒に希望をもって生きていた。ところが、今いった希望とやらは、俗に言う緑の衣裳

をまとめて海岸べりにアンカーを降ろして停泊していたわけではなく、天候が赦す限り、毎日午後三時から四時まで、菩提樹の木陰で、やがて誰もが知ることになるかわいいお腹をあちらこちらさせていた。その希望はクレルナーゲルと名乗っていた。——金利生活者 J.J.クレルナーゲル。彼は不動産もちの引退したコルセット工場主であった。それがとりわけテクラの希望の本星というわけだ。というのも、つまりはテクラの伯父に当たるというわけだ。だが、テクラの夫もこれを当てに借金したって構わぬと思っていた。恐らくはそうしても構わない正当性を一つ以上の理由を挙げて主張するくらいのことはやったであろう。

テクラ！今もお彼女の声私の耳底で響いている。ああ、なんという響き！きっとイングランドの女王エリザベスが、あの美しいスコットランドの王妃メアリーやあるいはフォン・エセックス伯に彼女の考えを申し渡すとき、その声はさぞかしこのような響きであったことだろう。——彼女のほっそりとした腰。それと同じひな型を見なければ、あの J.J.クレルナーゲルの後継者のショー・ウィンドウを覗けばよい。選りすぐりの近衛兵を除けば、全ベルリン市が東になって向おうと、説明することなどできはしない相談なのだから。——

この家に住む全御婦人方から、マダム・テクラ・ストゥリナツキーは憎まれ、誹謗され、且つ嘲笑された。そして男性群からは全員こぞって、公然とあるいは密かに崇拜された。階段を歩く彼女の衣擦れの音はそれぞれの胸のくぼみのなかで反響した。だが、彼女その人のなかでは何一つ響いていなかった。この愛らしいひとに最も公明正大だったのは若い外交官だった。そしてこの哀れな女に対し最も不当だったのが、我がピリッヒ夫人であったように思われる。後者は私にコーヒーと共に五階の住人に関する新しい話の種を毎朝運んできた。あるいは昨日のお報せの補足までお添えくださった。こうして彼女はいっさいの発言に責任を負うという態度だったので、私は彼女を目の前にして、彼女が息もつかずに伝える報告の真实性に疑問を差し挟むことなどとてもできなかつたし、そもそもそのようなことは爪の先ほども許されなかつた。伯父のクレルナーゲルが神話ではないことは、しかし、どんなことがあろうと疑いもなく確実なことであった。彼はマントイフェル内閣を称える名誉と評価のために忠誠の精髓に則るか、はたまた教会の利益保持の精神に忠誠を示すかの分かれ道で、なだらかに後者に贈与登録するほうへ傾いたのだった。格別そちらのほうに良さを認めたわけではないにしろ、まさに誠実に彼岸のほうへと傾斜していったことは、フォス新聞がやがて保証して見せた。彼が遺言状を書かなかつたのではないかという噂は、まづもって彼のような人物には期待しようたつて土台無理な話だった。

伯父のクレルナーゲルは神話ではない。況や伯父の遺言状も神話ではなかつた。その結果、私は、真実への全き帰依の念に囚われながら、この二つの偉大な事実が徹底的に作動し、やがて私にもその余波がもたらされ、結局その成り行きにしばし関係することになった。

「ことがあちらの上の階のお部屋で進行していった様子といえば、それは普通じゃございませんでしたのよ」と、ピリッヒ夫人は言った。「いいえ、私は決しておしゃべりなんかじゃありませんことよ。でもね、これだけは言うておかなければなりませんわ。だって、ドアに耳をあて

て聞くまでもなく、知る必要のあることはもうみんな知っているのをごさいますもの。まあ、お聞きなさいまし。——品のよいきちんとした人間が長靴などをはくでしょうか。家が誰かの頭上で崩壊するはずだという噂です。そして彼女が！まあ、なんてことでしょ。もちろんあの娘の頬をぶちましたわ。あのローザが鍵穴に目をあてているのを発見しましたときにはですよ。家に住む子どもたちの悪い手本となりますものね。それはなんと申しまして不名誉なことをごさいます。ところがまあ、それが上を下への大騒ぎ、とんでもないことです。——たまげた話なのです。もし仮にですよ、この私が百万マルク相続することになるとしても、こんな形で私はそのことをみなさんにお聞かせするなんてことしませんわ。きっとオペラ・ハウスでソロでも歌うことをごさいますとも！——おやまあ、私としたことが！もし私がクレルナーゲル伯父ならば！ついでに申しますとね、そもそも遺言書に何が書かれてるか、誰も知りませんのよ。あまり早く鳴き出した鳥は昼には大鷹に食べられてしまうというものですわ。まあ、何でございますわ、さもなきや、朝から晩まで喧嘩している二人ですもの。それにスキャンダルは引きも切らず続いているのですもの。ところが二人は一緒にギャロップしながら踊ってますの。家主の奥様が家のことを大切にお思いなさって、二人を放り出さずによくいられますこと。ほんとに不思議ですわ。私は確かに一人一人の人すべてに最善を願っていますよ。しかし、この遺産相続事件に関しては、私はむしろ口をつぐんでいたいくらいですわ。きっとすべて正しいのに相違ありませんわ、でもこの場合は、神の祝福はあまりに無責任で、不正としか言いようがないじゃありませんか。」

声は反響してざわざわと響いた。未亡人はひどく神経質になり、興奮して足ばやに飛び出して行った。あの偉大なる日の荘重な声が停止した。外交官補は最も重要な外交交渉を別の機会に延期して、家を離れないようにした。私はうきうきとすべての会合を取りやめた。人生そのものが、今日、説教壇上に鎮座していた。そして英知は常よりも懇ろに私の部屋の天井の上の人に説教した。男女を問わず、多くの友人たちが次第に到着し始めた。ざわめきが聞こえ、騒々しさはやがて階段を駆け上がっていった。刻一刻、私の頭上の騒ぎはあらゆる形で増大していった。足音の一つ一つに意味がこもっていた。

十一時きっかりに、クレルナーゲル伯父の遺言状は、従来からのしきたり通り、市の裁判所で開封されることになっていた。十時二十分、富くじ販売人のシュトゥリナツキーが私の部屋の扉を開け、ぐったりと最寄りの椅子に体を沈めた。

「あなたは私の今の気持ちを、友人や、いや私の家内からさえも救ってくれる最後の方です」と、彼はどもりながら言った。「水を一杯いただけませんか。出来ればアクラ酒を二、三滴垂らしてください。ああ、落ち着かなくては！大変、大変なことになった！この揺れ、この眩暈。この魂の惑乱！ねえ、君、これだけは明言できるよ。これは生やさしいことではないんだ！長い将来という奴の緒につかされる、すなわち入口の前に立たされるってことはね。こうして時計を握りしめながら、『お入り』と声がかかるまで待ち通さねばならないってことは。私は貴兄をまっとうな方だと見込んでおりました、ですからこの厳かな瞬間にあなたの胸に救

いを求めにやってきたというわけです。——どうか、ここで一息入れさせてください。テクラは上の部屋でソファに横になり、クッションのなかに頭を埋めています。」

「しかしなぜそんな風になってしまったのです？なぜこんなにも落ち着きを失い、理由のない熱に浮かされなくてはならないのです？」と、私は十一万五千ターラーと二棟続きの六階建て家屋を相続する必要のない者の気楽さで、冷静に尋ねた。「なぜそんなに焦り、異常なまでに興奮なさるのですか。クレルナーゲル伯父さんは、一時間半後には、あなたは億万長者の高みからこのベルリンの町を眺め下ろすことになるかと保証しているのですよ。——そうなればあなたは永遠に我々から別れていらっしやる。だとすれば今日の午後からたちまちこの私はあなたにとって何の意味もなくなるじゃありませんか？」

「私はいつまでもあなたとは知己の間柄でいたいものです！」と、彼の生まれつきの性質の立派さを率直に証明することになる話を、ストゥリナツキーは「しかし」と言葉をついで話し始めた。「本当はそんなことは問題じゃないのです。もしあなたが私にあの老人が私や彼の姪を相手にまんまときつね役を演じきるなんてことがないと断言できるのであれば、私はここで摂氏マイナス二十度の氷柱のように冷静そのもので座っていられるでしょうに。このようなときにいったいこの誰なら信用できるというのです？富くじ販売人というのはそもそも信用できるものじゃありませんがね、遺産相続人ていうのはもっと信用できない話ですからね。まだ十分ほどあります。私はその間に私たちの話をあなたにお聞かせしましょう。そうすれば少なくとも数分間は少しは楽な気持ちで乗り切れるというものです。」

「それには及びませんよ、あなたのお話ならば私は存じておりますから」と、私は笑いながら言った。「あなたは伯父のクレルナーゲル氏に富くじをお売りになった。それが五千ターラーの大当たり。それを機縁にその後も、テクラ・クレルナーゲル嬢目当てに、つまり現在の奥さんをですけど、家の様子を偵察し確認して、利用した。あなたはあなたが募集した富くじと幸運によって家族同様のつきあいをするようになった。しかし、それだけであなたは満足しなかった。あなたはさらに多くを、そしてますます多くを望んで欲深くなっていった。それはハンサムで世事に長けた若いあなた自身にとって、またあなたの立派な頬髭に至ってはなおさらに造作も無いことだった。テクラはあなたの申し出を承諾し、老人はあなたに愛娘を渡した。——」

「畜生、あいつは全くひどい奴なのに！」と、富くじ販売人は金切り声を上げた。「あなたは驚くほどよくご存じなのです。しかし、この番号札についてはあなたが私を笑いものになさろうというのでなければ、こう申さねばなりません。あなたはやはり十分知ってはいらっしやらない、と。私は伯父に喜んで真心を差し出すつもりだったのです。ですが、私は金庫の鍵は抜き取って取り置いていたつもりでした。真心と鍵、鍵と真心と繰り返すうちに両者は互いに癒着し、はんだ付けになってしまいました。そして鋏でしっかりと留められ、その結果、ごま塩頭の野蛮人のあの人で無しは、この両者を独占してむしろ自分自身のために握り込んだのです。ですから、——彼は私たちを、自分の姪に一年分のものも持たせず、戸の外に閉め出して

しまったというわけです。しかし、こういうおまけは付けてくれましたよ。高笑いしながら、私の商会のモットーを特別の意味合いを込めて引用するというのをね。つまりフェーリックス・ストゥリナツキーのもとで神の恵みを得んことをと。」

「ああ、それで」と、私は驚きながら次のように言った。「ことここに至っても、まだ遺言状にほんのささやかな望みしかかけることしかできないわけですね。なるほどこれほど納得のいく驚きはないと憚ることなく明言できますね。」

「その通り、まったくおっしゃる通りです」と、その男は神に全幅の信頼をおくあのお定まりの言葉〔前掲の発言の直訳は「義をもちて、完全無欠なる義をもちて」、つまり、神によみせられた義なる者の「信頼関係」を踏む〕をはきながら深いため息をついた。それから彼は発作的にぐっと身を乗り出して、こう囁いた。「私はあなたに、この異常な興奮状態に私をねじ込み、ねじ上げていったのはほかならぬ妻であったと誓ってお伝えしておきます。ご承知の通り、私はその子をほんの初めの頃こそ伯父の存在を考えて引き受けることにしたのです。こう申したからといって、私は別に嘘をつこうとしているわけではないのです。別に恥じなければいけないことでもありませんので、正直に白状しますが、次第次第に私はその子に惚れていったのです。これは今というこの瞬間も、自由意志で男が告白する紛れもない事実なのです。ご承知の通り、私たちはこのいまましい家で噂されています。しかしそれよりはもう少しましなのです。——テクラはあらゆる手段を講じて、通常の水準以上に身を保っていました。ところが彼女より以上であれ、以下であれ、植物のように無気力に生きている人間たちはそうした彼女を決して容赦することがなかったのです。私はバイエルン人たちを軽蔑しますし、この件に関してありもしないことをなすりつけていく手のこんだ噂のすべてを軽蔑しています。私は軽べ…、いや、もうその時が迫ってきました。私のささやかな家に起きつつある幸運に主題をつけようとする、そのたびに千人のシェークスピアが私の胸のなかで大きく膨れ上がってくる始末なのです。ああ、ほんとに、お若い学生さん、あの弓と矢をもったキューピッドがあなたの胸をノックしたことがおありなら、お分かりだろうが。そうでなきゃ、なかなかお分かりにはなりませんでしょう。彼女は美しく、貞節でした。彼女は時折り、私のことをよく笑い飛ばしたものでした。そうすることで、次第次第に私の剛毛の生えた男の誇りを傷つけ、繕い、そして改めて切り刻んだのです。——ああ、もしあなたが五年前に私と知り合いになる運命でしたら。あの幸運であると共に不幸な番号が私の販売籤にふりかかったあの五年前よりも以前に。しかし、私たちはなるがままに任せるしかないのです。私のような性格のものには問題じゃありません。が、しかし、テクラのような性格には重要だったのです。彼女はほかの家庭夫人ならばボンネットを下げて顔を背けるようなありとあらゆることを私と一緒に大胆にやったのです。私たちの生活用の小さな船は娯楽用船とさして変わらない程度でした。私たちはたっぷりの困窮に追いまくられ、幾度挫折をくり抜けてきたことでしょうか。債権者や負債者に、そして幻想に投機に、あらゆる様相を呈して襲う不安に取り囲まれながら、がんじがらめになっていたのです。たびたび自暴自棄になって、もち札を机の上に投げ出したくなったとき、テクラはまるで英雄のように、



あのオルレアン少女のように前面に躍り出したのです。ありがたいことに下劣な世間の噂がすべてあれの耳に入ることがなかった。クレルナーゲル伯父に対する最新の幻想も彼女のせいになることでしょう。このかわいそうな娘は、あの善人が私たち夫婦の幸福をゆがめてしまうのではないかという考えで頭が一杯なのです。家や動産、それにその他の財産に関してはそれは問題じゃなかったのですが。しかし、夢はどこか心地よいものです——でしょ？哀れな悪魔にとっちゃ、夢はどこか甘い誘惑の混じったものです。——そういうものでしょ？私たちは微かに、ほんとに微かに希望を持つようになったのです。しかし、次第に私たちの希望は私たちの背丈を越えていくようになりました。自家用馬車に馬という思いつきが全力疾走で私たちがめてやってきたのです。その日私たちはここ数年続いた断絶状態後初めてご馳走を前に彼のところで昼食を共にしたのです。このご馳走がもとで故人は死ぬことになったのですけれど。このとき老人はほんとにある和解をしたのです。もちろんここここで背筋がぞっとするほど粗野で毒を含んだ言葉を投げてきましたけれど。テクラはそれを帰宅の道すがら、『愚直な粗野』と言っておりました。でも家につくと私にキスをし、こう保証したのです。私たちは彼の心をきっと『手に入れる』わ、と。こういうわけで砂上の楼閣はうきうきとそこに立つことになったのです。しかし、それも一時間以内に抽選です。もし私たちが当選者として裁判所から出てくるのでなければ、まだ生きていけるかどうか。それが今問題なのです。私はこれまで一度も賭けたことのない運命相手の勝負なのですから。ああ、とんでもない！——十一時になった——馬車が停まる。振り子が最後の仕事をなし終える。——もう一滴気付けの酒をついでください。ああ、そろそろそこにテクラが来てます。——ごきげんよう、お幸せに！たとえ二度とお目にかかることがなかりょうと、衷心より敬意を込めてご挨拶します。——」

彼は話を中断し、両こぶしを額の前でうち合わせ、よろめきながら出ていった。テクラは黒い絹の喪服を着て、階段を駆け下りていく。——不明瞭なぶんぶんいう音と、ぶーんとうなるような音、それにぼそぼそと呟くような声がいっしょくたになって家全体に浸透していった。馬車が出発した。それから——私たちは私たちだけとなった。そして、建物の住人たちが全員、それぞれの家の戸口から転がり出た。——この日の大問題のために私的な利害関係はいかなるものであれ放棄された。それはあの一八六五年の最高に蒸し暑かった夏の日に劣らぬほどの蒸し暑い、まことに蒸し暑い日であった。

私は窓際に立っていた。そして立ちこめた霧を見つめていた。階下ではバイエルンの彼が興奮して歩き回る音が騒々しく響いていた。——だが、そもそも外交官の忍び足など想像もつかないじゃないか！

おなじみの女主人のビリッヒ夫人のボンネットが再びドアから押し入ってきた。

「まあ、やれやれ、彼らはとにかく出発したわね。——ああ、私の足には鉛が詰まったみたいだわ。——ちょっとごめんなさい。」

彼女はストウリナツキーが座っていた場所に座った。

「家全体がまるで反乱のなかに置かれたみたいだわ。ほんとに警備の人でも玄関にたたせてお

かなくては。これっていったい何なのでしょう。ひどい話だわ！こんな機会に隣人に善や最善を施すとき、どんなに穏やかにそっと行われるものか、初めて分かるというものだわね。彼らが百万マルクを手にして帰ってくれば、そりゃ真実うれしいことです。でも結果一文無し、いっさい何も無しで帰ってきて、そのとき起こる騒ぎのほうをむしろ聞きたいものですわ。私たちはみんなそちらのほうを苦しいほどに待ち望んでいるのだ、と言えましてよ。ローザなどは彼らの家のドアをわら箒や一抱えの古粗朶で飾り立ててやるつもりなのですから。でもそれには私のキリスト教徒の慈悲深い心が許しません。だってそうでございませよ、つーんとお澄ましの方がきっと私の首に縄をうって刑事裁判に掛けるでしょうもの。まあ、ほんとに、遺産だとか、クレルナーゲル伯父だとか、いっそなんにも関係がなければ良かったらうに！きっと私たちは日没までにはまだまだいろんなことを体験しなければなりませんでしょうよ。内庭に面した別棟では男性コーラス・カルテットによるセレナーデと『ああ、汝愛しきアウグスティン』〔ウイーン発生の流行歌〕が準備され、それには二本のクラリネットと一提のバイオリンがつくという噂です。向かいのパン屋は金の縁取りのついたピンクの紙に計算額を記入し、一編の詩を添えてその計算書を白い服を着た四人の見習い職人にささげさせるつもりだということです。食料品店も鐘がなるのを待ちかねているし、仕立て師シュテイベのところでの緊張ぶりに至っては。もうとでもこれ以上、お話したくありませんわ。こう申しては何ですけれど、どこもかしこも落ち着きを失っています。こんなときほど神経を持ち合わせていたことをいやというほど思い知らされることはありません。」

私は再びひとりになった。そして十分間を数えた。十五分——十一時半——

十二時！

鐘の音が私の魂の奥底で共鳴した。——今はほかでもない自分のために水にアラック酒を数滴垂らして飲み物を作る必要があった。このとき待ち望むということは何ほど途方もないことであったことでしょうか。確かに、自分はこの事件とはそもそもこればかりも関係がないのだ、と五分ごとに言い聞かせはしたのです。それは外交官も同じことで、彼は、旅券だか、あるいは通過証の件で彼の仲介を求めてきた不幸なバイエルン出身の旅行中の若い職人を人だかりのする階段で突き飛ばし、そのまますぐに馬車に飛び乗り、霧のなかに消えていった。

一時！

家を包む熱は最高に高くなっていった。このときから一瞬ごとに今か今かと彼らの帰宅が待たれることになった。近づいてくる馬車の音がするたびに我々はほとんど発作的に体を緊張させ、気持ちは氷点から沸点まで目盛りのすべてを一気に駆け上がり、急降下した。ピリッヒ一家はその妻にして母親をはらはら気遣いながら見張っていなければならなかった。それには理由があった。例えば、やがて息を詰めて待っていた二時半を告げる鐘の音が空気を震わせながら響きわたっていき、バイエルンの外交官が半ば気を失ったテクラを馬車から抱え下ろし、階段を

介助しながらあがって来たときに、また、夫であるストゥリナツキーが市の裁判所から妻と連れだつことなくひとりで、驚き啞然としている自然哲学の貧乏学生さん以外の誰かが、まるで窓なり部屋の入り口なりから覗いてみているに違いないと思ひなして、帰宅してきたときに、もちろん、椅子専門の御仁である学生のほうは当然机にかじりついているはずであるのだが、しかし、いずれの場合にも、ビリッヒ夫人を将来人の心を知る研究の貴重な材料として保管しておくために、そうしてただかねばならなかったのだ。テクラの帰宅によって生じたことは私にとってその他いっさいを背後に押しやってしまうほどのことだった。家であると同時に地獄であるこの場の嘲笑はすべて遠く、ぼやけた鈍いざわめきが変わっていった。四時。テクラは尾羽打ち枯らしたイーリス〔ギリシャ神話の神の使者〕を私のもとに遣わした。女神の使者イーリスは私に彼女の女主人の挨拶と懇請を伝えにやってきた。私は彼女のもとへ上って行った。

私の頭上の微かなすすり泣きは、とうに私にある軽い半狂乱状態を送り届けていた。私は転がるように階段を駆け上っていった。そしてたちどころにあの美貌の不幸な女性の前に、ひとつ飛びで立っていた。カール大帝に仕えた側近の騎士といえども、これ以上に慰めの良き意志を備えて急行することはなかったでしょう。

ソファに座ったまま、私の理想の方は涙にくれた顔で私を迎えた。

「あなたは神学者さんでいらしたかしら。そうでなければと思いますのに！」

「いいえ、ち、ち・が・い・ま・す」と、私は動転して、突拍子もないくらいに吃もってしまった。

「それは悲しみにくれています私にはうれしいことですわ。教会は、行けばあらゆる慰めをばいと私に投げてよこしますことでしょうかとも。でも私は決して、ほんとに決して別の生き方に我が身を委ねて慰めを得ようなんて思いませんわ。クレルナーゲル伯父とあちらで再び巡り会うことがあるかもしれないと考えるだけで、ぞっとします。誰かがもうあなたにお話しましたかしら、あのひどい男が私たちにどんな仕打ちをしたか、既にお聞きかしら？」

「いずれにしましても無責任にですよ。しかしあなたは、私が詳しいこといっさいに耳をふさいでいたことをお知りになれば、薄情なと思われるはずですよ。」

「まあ、お聞きください。——あなたはお若くていらっしゃるけれども、一人前の立派な方です。ですから他の人のように私どもの難儀を聞きましても、笑ったりなさいませんでしよう。私には大きな銀のスプーン匙一つきりです。その上、この匙を口にくわえて私は誕生したのだが、やがて私がそれを木の匙と取り替えることになるだろう、がそうだろうとそれは彼——つまりクレルナーゲル伯父のせいではないと註書きを添えているのです。フェーリックスは新しい食事用洋銀の匙を贈られ、それには伯父の自筆の署名と、彼——すなわち伯父ならば、こんなひどい騙され方はしないだろうに！という言葉が添えられて、遺贈されましたの。——私が気を失ったとき、彼らはみな笑いました。そして彼らは、私が意識を吹き返したとき、また笑いました。」

不幸に打ちのめされた夫人が話をしているとき、このカール大帝側近の騎士の胸中で矛盾す

る感情が互いにせめぎあうということは金輪際なかった!この若い夫人に暴力を加えようと思うか、あるいは既に行爲に及んだかした竜なり、巨人なりが、もしかして無限に明るく大胆な竜、あるいは巨人であつたりすると、この騎士はいったい何を言い、すべきであり、できるで  
ありましようか。しかし、

いかに暗い衝動に駆られようと、善良な人間は

きっと正しい道に立ち戻る<sup>6)</sup>

私はこの夫君の運命を気遣う質問という形にすり替えて、私の膨れ上がる当惑を隠した。テクラは呻くように言葉を吐き出していった。「私を襲った一撃は彼をも大地にたたきつけたのです。彼はもはや自分が何をしているのか分からなくなっていました。彼は私をフォン・ブローフバー氏の腕に私を残したまま、姿を消してしまつたのです。彼はきっとウンターバウム川のはとりで発見されるのですわ。でも私は彼を引き留めようとはしませんでしたの。なぜって道がぬかるんでいようと彼の後を追っていくというのが私の堅い目的なのですから。」

「テクラ!」と、私は叫び声を上げてしまった。「マダム・ストゥリナツキー!」

「ええ、そうですとも。そうなっていくことでしょうかとも。」——この足許の基盤喪失といふこここのところから救い出される道はそれ以外にないのですから。」

「私は彼を、つまりあなたのご主人を探すことが私どものまずやるべきことだと思いますけれど」と、私は自分の年齢以上の状況の把握ぶりを示しながら、語った。「あなたの身に迫っている弔問客に備えて、まず、何をなさりたいと考えておいでですか。まあ、お聞き下さい。——階段に片足かけた意地悪な世間に耳をお澄まし下さい。涙をお拭き下さい。小路を吹く風がきつと気分をよくしてくれますよ。さあ、腕に捕まってください。あなたがフォン・ブローフバー氏の腕を優先しないというのでしたら。——」

「フォン・ブローフバー氏が私にとってなんだっていうのでしょうか。ああ、フェーリックス、私のかわいそうな、かわいそうなフェーリックス。お聞きになって、私が——私ひとりが彼をこの過つた希望に誘い込んだのですわ。彼にこのまったくひどい失望を用意したのですわ。彼ならば、縋子のロープデコルテを着ない私でも愛してくれますわ。——」

「ですから彼の跡をさがさせなさい。そして彼に何も失つてはいないのだということをお告げなさい。なぜって彼は彼の妻を、彼のすべての魂に匹敵する魂をちゃんと手にしたまま、失つていないのですからね。」

テクラは悲しみの色がにじむ、濡れてきらきらと光る目から両手を離して、大きな目で私をまっすぐに見つめた。

「あなたは立派なかたですわ。あの『王妃、人生は美しいものでございます!』と、叫ぶ場面のエミーユ・ドゥヴリアン〔ドレーステンの宮廷劇場俳優、1803-72〕を彷彿させます。ご存じでしょ。ほんとにあなたのおっしゃるとおりですわ。私は皆の耳が張り付いているこの壁を、そしてドアの向こう側の意地悪な口一つ一つを軽蔑します。さあ、行きましょう。風、自由、光!私の夫はきっと探し出せましてよ。彼の事務所できつと見つかります。私のコートを取つてく

ださい。あそこにございます。絶望に叩きつけられているのならば、真の友情こそが彼を立ち直らせるはずですわ。泣きはらした顔をしていますかしら？ あら、ちっとも変じゃありませんことよ。でも、世間はそれじゃ面白くはないでしょうけれど。さあ、行きましょう。準備ができてよ。伯父はたしかに不愉快で一杯になった大きな匙を遺産にして残してくれましたわ。でも、私までも大きな足を基盤に生きて行くことができなくなっているのですしたら、私は再び考えを大きく持つことから始めることにします。急ぎましょう。ほんとにあなたのおっしゃることは全く正しいわ。こんなときこそ、私はフェーリックスの腕のなかに飛び込まなくてははいけませんの。」

私たちは私たちの前方でそして背後で交わされる視線や舌打ちに心煩わせることなく、頭をまっすぐに立てて、階段をおり、家の外に出た。既に宵闇が迫っていた。テクラが言った。

「ああ、暗くて私には幸いでしたわ。今日はほんとにひどい一日でした。たとえ私が学校で習った教科書の村娘のようにうぶでなくっても、まさしく今の私こそが壊れたミルク壺の横にいるのですわ。——まあ、ほんとに。やれやれ！」

彼女はガス灯の下に佇んだ。彼女がうぶに見えることはなかった。もとよりそんなことを彼女は望みもしていなかったのだが。この瞬間、銀の角燈を掲げた一台の優雅な二人乗りの箱馬車が前を走りすぎた。それには美しく着飾った貴婦人と巨大な髭をたくわえた御者が乗っていた。彼女は地団駄を踏んだ。その踏みつけ方ならばきっと冷たい地中に眠るクレルナーゲル伯父の墓まで響いていったにちがいない。——しかし、私たちの気持ちは私たちを全速力で先へ先へと駆り立てていた。富くじ販売人の事務所がある横丁に全速力でたどり着いた。入り口の曲がり角で私たちは立ち止まり、互いに歩み寄り、並んだ。テクラは今私の腕に依りかかり、呼吸をととのえていた。そうしている今の彼女は、極悪非道な故人ではなく、ただ一途に不幸な夫のことを考えていた、と私は明言できる。私たちはほとんどつま先立ちになり、建物すれすれに忍び足で帳場の窓の下まで近づいていった。

燈火の明かりが店の隙間から漏れ、横丁に光を投げかけていた。テクラが私の腕をきつくつかんだ。「ああ、よかった！彼は生きているのです。彼は生きていますわ！」と、囁いて、あげくに不必要なほどにどっと涙をあふれさせた。というのもそう簡単にフェーリックス・ストゥリナツキー氏はシュプレー河のニンフ（水の精）やウンターバウム川のほとりの河守りたちと関係するような人間ではなかったのです。

「お願いします。どうぞ、お先にまず覗いて見てくださいますし」と、彼女は声をたてず、氣息音だけでそっと伝えた。「私にはとてもできませんの。ああ、なんてことかしら、遺言状と弾丸をこめたピストルが彼の前に置かれています。ノックしてください。そもそも私を予定より早く未亡人などにならせないでください。」

私は目を店のぱっくりと口を開いた裂け目に用心深くそろそろと近づけた。そして小声で後ろに囁き返した。

「静かに、静かに——落ち着いて。彼が今見えています。彼は机に向かって座っています。」

そして——両手で頭を抱え込んでいます。——ジョッキが彼の前に立っています。——」

「毒。毒なのかしら!？」と、テクラは叫んだ。

「パンチ酒です!」と、私は再び囁いた。するとこの不幸者の忠実な妻は私の肩の上あたりにかがみこんで、同じように裂け目に目をあててのぞき込んだ。そして言った言葉はただ一つ、次の通り。

「まあ、思ったとおり!」

次の瞬間には、私たちはもうみなさんご承知のパンチ酒を囲む仲間とやらになっていた。一週間後、夫婦は住まいを去って行った。私たちは皆そこに共に住み、どんなに幸せだったことか。しかし、運命は二度とこの夫婦と巡り合わせることはなかった。一八六五年の七月のこの日、この午後、ただひとりのシュトットガルト生まれの男だけがテクラの遺産相続状とあのすべてを溶かし込む火とを私の一服の清涼剤と変えてくれることができたのだ。あの愚直なクレルナーゲル伯父の銀の匙と洋銀の匙が私たちみんなにとって和解の火となったあの火を。

### 註

- 1) Karl Gottlob Zumpt (1792-1849) のこと。一般によく使用されたラテン語の文法書の編者
- 2) Schauspiel: 一般に劇、演劇の意味であるが、ここでは文芸用語としての意味、すなわち、「厳粛な内容であるが、悲劇とは違ってハッピーエンドに終わる戯曲」の意味で用い、それはこの作品それ自体の性質を端的に言い表すものとして、ラーベは意図的に用いているといえる。
- 3) いうまでもなく、ルビコン川を渡渉した際にシーザーが語った有名な言葉を借用したもの
- 4) Thekla: シラーの戯曲 »Wallenstein-Trilogie« (『ヴァレンタイン三部作』) に登場する女性の名前であるが、ここでは皮肉と揶揄を込めて使用
- 5) kaiserlich und königlich: 旧オーストリア=ハンガリー帝国における [オーストリア] 帝国及び [ハンガリー] 王国の俗にいう二重帝国 (王国君主政体) 統治の時代をいう
- 6) ゲーテの »Faust« (ファウスト) からの引用

### あとがき

本作品の原題は »Theklas Erbschaft« である。1865年11月1日から同年12月4日のほぼ1ヶ月の間に執筆された作品であるが、未だ何ものでもないラーベ (1831-1910) が作家としての能力を推し量ろうと世に問うた処女作、 »Die Chronik der Sperlingsgasse« (1855) の完成後、10年を経て上梓された作品である。しかし10年の歳月は遠くない。小説家としての懐胎期にあったラーベの内面を窺わせ、むしろ処女作と直結し、数少ないベルリンを舞台にした Berlin-Roman として初期のラーベをよく伝える。

ラーベは自身に関する事柄、いわゆる伝記と呼ばれるものに対し黙秘を続けた。近頃出版されたラーベの評伝 »Wilhelm Raabe—Eine Biographie« (1933) の著者 Werner Fuld はベルリン時代にラーベがひとりの女性に出会ったという微かな手がかりをもとに、地方の名家である生家が受け入れるはずのない「新しい女性」と作品の連関を指摘する。この女性は大都市の匿名性を代表した。大都市の放つ匂いの一つであった。匿名性は香気であると同時に臭気であるが、すべてを白紙状態に置くという魅力があった。それは出発をイメージさせる都市の吸引力となり得たが、当時に限らず広く保守性の忌むものであることは論を待たない。これを承知するラーベは彼女を放置する。この放置したもの、それが作品上に蘇る。しかしラーベはこの女性に頹廃をみていない、むしろ時代が産み落とした階層として市民の

枠のなかに加えようとする。こうしてこの作品の女性主人公テクラは、処女作のなかの大都会で懸命に生きる女性と同様、経済的急上昇する都市文化を背景に翻弄されながらも懸命に自立する弱々しくも強い女性の一族の出身とされる。今、我々は覗き見趣味的に捉えることはできない。恐らく放置という言葉は強すぎるであろう。が、Werner Fuldの評伝の注目すべき点は虚実の臨界点に敢えて身を置き、従来のラーベに加えられた粉飾を払拭し、本来の彼の顔を写し取ろうとする位置取りにある。そうした危険な試みなしにラーベの文学が内包するモデルネ性並びに文学史上における彼の文学の位置づけ、正当な近代的文学評価への道筋をつけることができぬからである。

我々は19世紀後半の作家たちが文芸作家としての道を辿ろうにも身分保障はあまりにも不備、従がって、職業作家は、外部の要望に応え筆を曲げることを余儀なくされることもあるという時代背景を背負っていた事実を想起せねばならない。他方、ラーベの考えとは無関係に、アンチセミニズムに端を発し、世論が大きくうねりを見せるなか、作品から言質のみが抜き取られ歪曲化されていったラーベ像がある。この粉飾は第2次世界大戦におけるあのナチズムの強引な統制を経て、むごい傷跡を残しながら1985年代まで曳航したことを忘れてはならない。この観点からすればラーベ研究は緒についてほどない。そして彼を今、掘り起こすことはさまざまな意味で現代を問い、明日を模索するうえで恰好の材料を提供することに思い至る。ちょうど、処女作に「知るということのなかに未来は存在するのだ」と語られたように。

これは老カルステン親方の思い出話に耳傾ける小さな聞き手の輪のなかに生じた共感であった。ある嵐の夜、かつて誇らしげに眺め、近頃は目を伏せ、顔を背けて通った教会の戦死者顕彰板が焼け落ちた日、「あの板が燃え落ちたよ、母さん。もう、あれを見なくて済む」と、ぼつりと語る親方に共感する声だった。対仏解放戦争（1813-15）後、政治的統合と憲法により保障されるはずであった市民権はたゆたい、実現からほど遠い。解放戦争で戦死した二人の息子の犠牲は無駄であった。しかし、志は残っている。共感する胸に木霊が響く限り、と。ラーベの意識はたえずここに帰着し、そして常に新たにここから出発していった。

話を『テクラの遺産相続』に戻そう。ラーベは1910年までの長い歲月、作家活動を続けた。そうした厳然たる事実を前にして、「もし」を語ることは意味のないことである。とはいえ敢えて言及し、従来看過されがちであったいわば世間知らずの大胆で清新な初期作品が、作品のもつ表現の新しさと時代を呼吸しようとする感性が、当時の批評家、出版界並びに読者によって受け入れられていたならば、という思いに立ち、再評価の照明をあててみることも一考に値する。そして今、その期は熟したとみる。そうするときいもかけず、横丁を曲がって出会い頭に壮大な問題に鉢合わせになってしまうのだが、すなわち時代がひとりの作家に、人間に作用するその事態に、他人事ならぬ歴史を運命として受け入れねばならない人間一般の問題に直面する。そうした大問題を前にするとき、いかにもこの作品は小片に過ぎる。ただ、あくまでもラーベ研究全体を視野にいられた際に、こうした発言も可能であろうかという指摘にとどまる。

作品は一読、明らかのように枠物語形式を採用。作者ののっぴきならなさ作品の枕にすぎぬ「枠」のほうで吐露される。彼の人間としての絶叫が冒頭で噴き出してくる。彼は自殺者の頭蓋骨の話は是非せねばならなかった。それは拭いても拭いても、後から後から彼につきまってくるマルデブルクの記憶である。彼は1849年17歳とほぼ6ヶ月で同市の書店で見習い修業に励む。その書店主の弟はある日ピストル自殺をはかる。ラーベは彼の死体をベッドまで運ばねばならなかった。ただでさえ深淵から重苦しく招きかける不気味な自殺はキリスト教の厳しい禁忌行為として二重の桎梏となってラーベに激しい衝撃を与える。実際、彼は修業半ばで夢遊病状態に陥り、帰郷を余儀なくされる。この精神に受けた傷は生涯つきまとい、そこから身を引き剥がすがごとく渾身の力をふり絞って創作に向かう。それが彼の作家活動の一面であった。そこには深淵の縁から内を覗いた者の感覚として、深淵の境界を踏み切ったものに対する国家権力のありように憤りが際立つ。この非情性が合理性を帯びて登場することへの警戒がひときわ高く発せられる。当時国家権力は遠い絵空事ではなく、マグデブルクで露骨に現れた。同市は1848年の3月革命の首謀者たちの収容先であり、ラーベの修業先の書店に上流知識階級の虜囚たちは書物の注文、購入に訪れた。他方で禁書狩りが実行された。次々に発令される禁書と検閲、そして当

局の立ち入り検査に対応して、守るべき書籍を目立たぬ場所に移動させねばならなかった。その上、弾圧と密告社会が抱き合わせの現実であった。

もとより本は読んで、それ自体読み応えのある作品でなければならない。その観点からすれば、研究者がわざわざこうした注釈をつけなければならないということは、いかなることかという反問にたちまち直面する。しかし、こうしたことは同時代の人々にしてみれば、言う必要のない事実であったことも、同時に想起されねばならない。「作品に歴史を読む」という態度はいうまでもなく慎まねばならないが、150年近くを隔てた我々には、より深く読む、よりよく盛られたメッセージを理解する上でこうした時代背景を踏まえる行為もまた欠かせぬ。さらに言い添えるならば、ラーベ翻訳が逢着する困難性は、まさに彼の時代への感覚の鋭さ(つまり常に時代背景を踏まえる必要があるということ)と、同時にその鋭さと同じだけの韜晦と諧謔に帰着する。この二重性を自由が抑圧された文学形態の一つの在り様として見ることを可能とするほどに。事実、慎重な発言が求められた時代、ラーベ作品の研究は「物語技法としての諧謔」という視点から論じられたことがある。

以上、翻訳が極めて少なく知られざる作家であるラーベの作品が編集委員の方々の温かい理解のもと本教養篇で発表される機会を得たことはまことに慶ばしく、実にささやかながら、本翻訳の研究史上における意義に言及し、謝意としたい。

テキストはブラウンシュヴァイク版 Theklas Erbschaft in Wilhelm Raabe Sämtliche Werke in 20 Bdn. Bd. 9/2. Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen 1976 を用いた。